平成30年度・令和元年度
姶良・伊佐地区研究協力校（特別支援教育）研究公開
伊佐市立羽月西小学校

1　研究主題

インクルーシブ教育の視点に立った指導・支援の研究～算数科の実践を通して～

2　研究発表

【岩水博幸教諭による研究発表】

伊佐市立羽月西小学校では，２か年にわたり，算数科を中心とするインクルーシブ教育の視点に立った指導・支援に取り組んできました。

研究発表では，子どもたちの実態を的確に捉えることで，きめ細やかな支援を明確にし，学習に生かすことができたこと。「分かる授業づくり」を目指した学習過程（複式学習指導の指導過程）を工夫する取組が子どもたちの「できた」という実感につながったこと。板書の仕方やノートのとり方等を統一することで，安心して学習に臨む子どもの様子が見られるようになったこと。以上のような取組が示されました。

なお，仮説及び主な取組は以下のとおりです。

【仮説１】

特別な配慮を必要とする子どもの実態を把握し，支援体制を整えることで，特性に応じた指導・支援が展開できるのではないか。

【実態把握をもとにした支援体制の構築】

・　校内の支援体制の構築
　　個人ファイルによる実態把握　　個別の指導計画の作成
・　保護者との連携　　・　関係機関との連携　　・　中学校との連携

【仮説２】

特別な配慮を必要とする子どもの困り感やニーズに応じた授業を展開することで，算数科においてできる喜びを味わうことができるのではないか。

【分かる授業づくり】

・　複式学習指導の展開　　・　学習課題の工夫　　・　自力解決の場の工夫

【仮説３】

支え助け合う子どもたちの関係性を築き，学びを支える環境を整えることで，特別な配慮を必要とする子どもが，生き生きと学びに向かうことができるのではないか。

【学びを支える環境づくり】

〔物的環境〕
・　板書の仕方　　・　発表話型
・　ノートの書き方
・　ガイド学習の進め方
・　教室設営　　・　特別支援学級での取組

〔人的環境〕
・　ソーシャルスキルトレーニングの活用
・　ペップトークの活用

３　公開授業

５・６年生の複式学級で川原維史教諭が授業を公開しました。学習過程を工夫し，両学年の導入時の「つかむ・見通す」段階を直接指導し，特別な配慮を必要とする子どもが確実に課題把握ができるように「ずらし」を効果的に設定していました。また，実物模型や操作できる教具が準備され，視覚的に捉えやすくする工夫がありました。さらに，直接指導から間接指導に移る際は，特別な配慮を必要とする子どもがしっかり見通しをもち自力解決に進んでいるか，つまずいていないか，その学習を見取る見届けタイムが指導案に明記され，学習意欲を高める声かけができていました。

【公開授業の様子】

特別支援教育支援員との連携は，特別な配慮を必要とする子どもに対して，支援した箇所が分かるように，支援員がノートの左端に☆マークを付けたり，どのような支援をしたかを簡潔に書けるつながるシートを活用したりして，支援員とのスムーズな連携が図られました。「調べる」段階では，一人調べやペアで自力解決を図り，主体的で対話的な学びが見られました。

物的環境や人的環境が整えられたユニバーサルデザイン化された教室で，安心して授業に臨む子どもたちの姿を観ることができました。

４　授業研究

授業研究では，本校の研究・実践が，子どもたちの「できた」「分かった」を味わわせる手立てとして有効な支援となっていたかについて，付箋紙を貼りながら，子どもの学びの姿について熱心な協議がなされました。参加者からは，「インクルーシブ教育は，課題のある子どもだけでなく全児童にとって効果的な取組だと思いました。特別支援教育支援員さんとの連携がよくとれていて，つながるシートはとてもよいと思いました。」等という感想が聞かれました。ワークショップ型の授業研究であったこともあり，熱心な協議となりました。

【ワークショップ型授業研究】

- 研究内容を確実に具現化された授業でした。普段の学級経営が見えた１時間で，教室環境も含め，お土産をたくさんいただきました。子どもたちも前向きで，一生懸命取り組んでいる姿に好感がもてました。
- 日頃の授業で行っている配慮が分かる授業だったと思います。子どもの自己選択を大切にされている手立ては，参考になりました。子どもの実態把握が的確で，多角的な視点で授業の流れなどを工夫していると感心しました。大変勉強になりました。